

「遺族となって 22 年」

犯罪被害者御遺族 米村 州弘 氏

【ネットで知り合った男に殺害され、変わり果てた 20 歳の娘と対面】

私は、ずっと商売をしていました。なかなか子どもたちと接する機会がないので、夕食を一緒にするというのが我が家のルールでした。22 年前の 9 月 25 日、年に 1 回の松茸パーティーは、みんなが喜んで、その日に、まだ生まれたばかりのセキセイインコを買ってきていたものですから、3 人の娘たちはとても喜んでいました。22 年前の 9 月 25 日の夕食は、楽しい楽しい時間でした。

9 月 26 日の金曜日に、バイト先から、「智紗都さんと連絡がとれません。何かありましたか」という電話がかかってきました。さすがに、20 歳の娘で、とても信頼がおける子でしたので、「何があったんだろう」くらいの気持ちでした。一晩中電話をかけ続けたんですが、つながることはありませんでした。それで、私は、翌日警察に届けました。

警察は、20 歳の娘が 1 日いなくなったくらいでは、取り合ってくれません。話もろくに聞いてくれません。私があんまり言うものですから、「じゃあ、家出捜索人として受理しましょう」ということになりました。家出捜索人ということは、捜査をしないということです。私は、1 日考えて、これでは絶対智紗都が見つからないと思い、それから、夜 8 時頃、友人の家に行きました。そして、友人に智紗都がいないということを話しました。その友人というのは、高校生からの親友のうちの一人です。その友人に、「お前の力でどうにかならないか」と言うと、彼は数か所電話をかけてくれました。そして、友人から「熊本東警察署にとっても優秀な刑事さんがいるから、その人に詳しく話をしてくれ。そうしたら少しはよい方向に進むかもしれない」ということを言われたので、「ありがとう」と言って、夜の 10 時過ぎに私は東警察署に向かおうとしました。私が一人で行こうとすると、その友人が、「ちょっと待て、俺も一緒についていくから」と言って、正装に着替えて、胸に弁護士バッジをつけて一緒に行ってくれました。

東警察署では、私が一人で説明しました。そして、その翌朝電話がかかってきて、「娘さんを事件として捜査します」ということになりました。

警察の力はすごくて、証拠は全くなかったのに、警察が絞った加害者を自供に追い込んでくれました。その自供がなければ、絶対に娘は見つからなかったと思います。

娘が見つかったのは、大阪の金剛山という山頂付近の土の中でした。2 週間土の中に埋められていた人間って、どうなるか想像がつかますか？顔は全く赤茶けていて、唇はめくれ上がって、もう、人間とは思えないような、そのような姿に変わっていました。

私は、大阪の富田林署の野外駐車場で、マスコミが写真やテレビに映している中、当時はブルーシートも何にもない、そのような状態で娘に会わないといけませんでした。

私が最初に近づいて、棺桶の小窓を開けると、そこには本当に「変わり果てた」という言

葉が一番ぴったりの娘がいました。もう、娘とは分からないくらいの顔です。今、(写真に)映っているちいちゃんとは、もう全くの別人がそこに横たわっていたんです。

私が最初に会い、妻が会い、そして長女と三女が会い、あまりにも変わり果てていて、みんな、「これはちいちゃんじゃない」と言いました。だけど、やはりなんとなく智紗都と分かるんですね。当時高校3年生だった三女は、この子は、このまま気が狂ってしまうんじゃないかというくらい大きな声で泣き叫びました。

警察から、恐らく大阪で茶毘に付さないといけないので、奥さんと2人で、ある程度のお金を持って大阪に飛んでくださいと言われました。私は、「大阪にはちいちゃんがいる」と思ったんです。だから、長女と三女にも、「ちいちゃんとお別れするかい、お前たちも一緒に行くかい」と言ってしまったんですね。もちろん、2人の娘は、ちいちゃんとお別れがしたいということで、連れて行きました。

次女の顔を見たのは、私たち家族4人だけです。なぜかという、人に見せられるようなものではなかったからです。どういうわけか熊本で解剖することになり、娘を熊本に連れて帰ったんですけど、私が22年前の10月11日に智紗都を家に入れた時、家の中に死臭がするんですよ。どんなにドライアイスで固めていても、家中に智紗都の死臭がするんです。智紗都の死臭を、まだはっきりと覚えています。忘れることができません。

【娘が殺害されたきっかけは、1台のパソコン】

その後、通夜、葬式、その後も仏事の中で、私は、実の母親、叔父、叔母から、「お前が智紗都を殺したんだぞ」と言われたんですね。実の母親や叔母たちから「お前が殺した」と言われることは、とても辛いことでした。

事件当初から、もちろん加害者がいて、加害者が殺して土の中に埋めた、それは頭の中では理解しているんですね。だけど、私は、事件直後から「智紗都を殺したのは私だ」と考えるようになりました。それはなぜかという、27年ほど前、普通の一般の家庭にパソコンが1台あるかないかという時代に、私は、ちいちゃんが第一志望の高校に入ったらパソコンを買ってあげる、それは3人の娘の未来のために絶対なると思いからでした。これからの世の中、パソコンが使えないと、絶対世の中についていけない。だから、娘たちのためにパソコンを買ってあげました。実際、今の世の中、そういう社会になっていると思います。

そして、娘たちは、どこで習ってきたのか分かりませんが、パソコンの使い方を、本当にすぐ覚えたとですね。そして、3人の娘がそのパソコンで20数人の人たちと、文字だけの世界の人たちと、やり取りをするようになりました。

最初のやり取りは、たわいもないことです。ちいちゃんの場合は、「どんな本を読もうかな」とか、「どんな部活に入ろうかな」とか、「どんな仕事を目標せばいいのかな」とか、高校1年生の女の子が日常に言うようなことでした。

我が家はさっき言ったように、夕食を一緒にするのがルールで、楽しい夕食を一緒にとっていました。ちいちゃんが亡くなったその年も、ちいちゃんが20歳、お姉ちゃんが22歳、

妹が16歳で、家族5人で海水浴に行きました。海水浴には、毎年行っていました。冬は、遊園地に行っていました。

家族は仲が良かったんですけど、やはり高校生になると、なかなかお父さんとは話さなくなるんですね。仲が良くても話さなくなるんですよ。文字だけの世界の人の方が簡単なんです。それで、ちいちゃんは文字だけの世界の人といろいろやりとりをするんですけど、その中で一人だけとてもいい答えを出す人が出てきたんですね。ちいちゃんは、もちろん同世代だと思っていたわけです。その人の答えがとてもいいから、その人のことを信頼していきます。そして、その文字だけの世界の人と、メールのやりとりを始めて4年半後、大学2年生の9月26日に殺されてしまうわけです。

加害者は、私よりも一つ年上の大阪に住む男性でした。ちいちゃんとやり取りを始めた頃は、奥さんがいて、子どもが4人いて、ちゃんとした金融会社に勤めていて、ちいちゃんへのアドバイスは、最初は本当に善意に満ちたものじゃなかったのかなと思います。だから智紗都も信頼していったんだろうと思います。

だけど、4年半という月日には、それなりのことがありますよね。皆さんは、年齢的に分かると思いますが、ちょうどその頃何が起きたかという、バブル崩壊です。大阪にあった加害者が勤めていた金融機関も、なくなってしまいました。

事件を起こす頃、加害者がどんな生活をしていたかというと、奥さんや子どもが住むマンションを出て、大阪の西成区で寝泊まりしながらアルバイト生活をするようになっていました。そして、彼は、人生をやり直したいと考えます。そして、やり直す相手に、どういうわけかちいちゃんを選んだんですね。

しかし、考えてみてください。20歳の娘が、私よりも年上の当時49歳の男性から、「結婚して人生をやり直そう」と言われても、「分かりました、結婚します」という女の子がいると思いますか？当然、当然のここのように、ちいちゃんは断ります。

しかし、人間というものはおかしいんですよ。特に、殺人を犯すような人というのは。その断ったことが、殺意になってしまったんです。ちいちゃんと結婚しようと言いながら、奥さんと離婚していたわけではないんですよ。そういう加害者です。

【家族の3人もが「大切な家族を殺したのは私だ」と考えるように】

さっき言いましたように、私が、22年経った今でもちいちゃんを殺したと思っているのは、「パソコンさえ買い与えなければ」という思いがとても強いからです。パソコンを買わなければ、ちいちゃんと加害者が結びつくこと、出会うことはなかった。だから、パソコンを買った自分が、大切な娘を殺してしまったと思うようになってしまったわけです。

ちいちゃんと2つ上のお姉ちゃんとは、とても仲が良かったんです。事件の1週間ほど前、お姉ちゃんがちょっとしたことで入院します。そこにちいちゃんがお見舞いに行って、「ちょっと困ったことが起きちゃった」と、相談します。お姉ちゃんは、「そんなことはお父さんに相談しなよ、お父さんに相談するのが一番いいから」と言いました。すると、ちいちゃん

んは、「そうだよ、分かった、でもお父さんに相談するのは少しだけ待ってちょうだい。自分でもう少しだけ努力してみるから」と言って、たった1週間後に、大切な妹が、ちいちゃんに殺されます。

お姉ちゃんは、「お父さんに相談しなかった私が、大切な妹を殺してしまった」と言いました。事件の3か月ほど前、ちいちゃんが高校生になって飼い始めた小鳥を大切に育てていました。ちいちゃんには、大学生になって、マンションを借りてあげて、鳥の世話はちいちゃんのお母さんがすることになりましたが、事件の3か月ほど前に、ある事故が起きて、その小鳥が死んでしまいます。

ちいちゃんは、大学生になって、楽しい大学生活を送っていたので、もう、加害者とのやりとりはだいぶ少なくなっていました。だけど、鳥が亡くなったことで、「さくらが死んでしまった」というメールを加害者に送ってしまって、それからメールのやり取りが復活してしまっただけです。このことは、警察の供述書で分かりました。

ちいちゃんのお母さんは、「大切な娘を殺したのは私だ」と言い出しました。残された4人の家族のうち3人までが、「大切な娘を殺したのは私だ」、「大切な妹を殺したのは私だ」、そういう家庭になってしまいました。

【「大丈夫？頑張ってるね」…やさしい言葉に傷つけられ、壊れていった妻】

私は、葬式から3日後、仕事に復帰しました。私の場合は、仕事に復帰しなければいけない状況だったんです。だから、復帰しました。その時はいろいろ言う人はいませんでした。

仕事は、スーパーの中の魚屋で、来客数も多く、妻と仲のいいお客さんもたくさんいらっしゃいました。

妻は、ずっと仕事に出ることができませんでしたが、半年以上経って、仕事に来るようになります。そうすると、どんなことが起きるか。私には、半年以上の間、誰にも声をかけられることはありませんでした。しかし、妻が仕事に復帰すると、妻と仲がいいやさしい人たちが、やさしい言葉で、やさしい気持ちで、やさしい態度で、「大丈夫？頑張ってるね」等と妻に語りかけます。そうすると、妻は、人前なのにぼろぼろぼろ泣きながら、「ありがとうございます。ありがとうございます」と言っていました。一人の人に1週間に1回、月に1回言われることでも、1700~800人の人が出入りするスーパーでしたので、それがずっと続くわけですよ。1年ほど経って、妻が、「仕事を辞めよう」と言い出しました。「ちょっと待てと。まだ、仕事を辞めてどうする？どうやって生活するんだ？娘のこともあるじゃないか」と。

妻は「仕事を辞めたい」、私は「それは絶対無理だ。家族のためにも仕事をしないとイケない」そのようなせめぎ合いが3か月以上続きました。そういう中で、妻が、壊れていくんです。おかしくなっていくんです。ちいちゃんのお母さんが、少しずつ、少しずつおかしくなっていくんです。それで、私は、仕事を辞める決心をしました。そして、事件があった年から2年目の10月いっぱい仕事を辞めるという決断をしたわけですね。

【被害者遺族にふりかかる裁判の負担】

当時は、裁判のやり方が違っていて、刑事裁判と民事裁判を別に起こさないといけませんでした。刑事裁判で、検察側が16年という求刑をしました。

ちいちゃんの事件の場合は、娘を殺した加害者の供述がなければ、絶対解決しなかった事件でした。先に話した弁護士から、「加害者の供述から解決した事件だから、求刑16年だが、実際は12年くらいの刑期になるから、覚悟しておけよ」と言われました。

6回目の裁判で、裁判所の15年の求刑が出ました。とてもうれしかったですね。加害者は、5回の裁判の中で、「嘱託殺人だった」とか、「娘が言うことを聞かないから殺した」とか、いろいろなことを自分勝手に言いましたが、裁判では、加害者が言うことは認められずに、加害者の一方的な思いだけで娘を殺したということになりました。

今でも、16年の求刑で15年という判決が出ることは、ほとんどないと思います。そういう判断をくださったので、あの時はうれしかったですね。

それでも刑期は15年です。娘は20年生きてきたんです。15年という刑期で、私は加害者を許したくなかった。だから、当然民事裁判を起こしました。民事裁判では、20歳くらいの子供が死ぬと、交通事故にしても何にしても、1億円前後の賠償金になります。ですが、今でも、犯罪被害者の人たちが、民事裁判を起こさないのは、ほとんどの人が、賠償金が取れないからです。

裁判にかかる費用は、だいたい1回の民事裁判で、弁護士費用など70万円から100万円くらいです。国に納めないといけない収入印紙代だけで、33万円払いました。国もおかしいですね。それを被害者からとるんです。

そして、民事裁判というのは、10年で駄目になってしまうんです。10年で、また再度裁判を起こさなければいけない。

私は、10年経ってまた、民事裁判をしようと言いました。そしたら妻が「もう、やめよう。もしものことがあったら大変だ。あんな加害者のために大切なお金を使うのはやめよう。家族のために使おう」と言いました。しかし、私は、「それはいやだ」と言いました。

その時22年間で初めて、家族4人でちいちゃんの話をしました。娘たち2人は、「私たちも加害者を許したくない。ちいちゃんを殺したあいつを許したくないから、民事裁判を起こす」と言いました。そして、裁判を起こしたわけですけど、また、お金がかかりました。それが10年単位で続くんです。毎回、毎回、収入印紙は貼らないといけない。こういう制度が、まだ日本に残っているということを、皆さんよく理解してください。おかしい法律がたくさん残っていますから。

【家族にとっては、たったの22年】

私は、ちいちゃんの話をとくさん家でしたかった。父親は、どうしても娘との思い出が少ないんですね。だから、ちいちゃんの話をとくさんしたかった。だけど、ちょうど妻が仕事

に復帰し始めた頃、半年過ぎたくらいに、妻に、「もう、家でちいちゃん、智紗都という言葉は使わないで」と言われました。「あまりにも悲しすぎるから、辛いから、だから、ちいちゃん、智紗都という言葉は使わないで」と。

私は、たくさん話したかったんですけど、それもできなくなってしまいました。事件後、親しい友人が、毎週のように来てくれました。それまでも月に1回くらいは来ていたんですけど、毎週一緒にお酒を飲んでいくんです。その時だけは、ちいちゃんの話ができたんです。それは、なぜかという、妻が自分の部屋に戻るからです。だから、その時だけは私はちいちゃんの話をつつと友人にし続けました。友達も、ずっと聞いてくれます。しかし、2年ほど経って、今でも友人の一人が「おい、米村、もう2年も経ったんだから、智紗都の話はやめろ。お前が辛いだけだろう」と言われたんですね。

私が、友人と飲む間中、涙をぼろぼろ流しながら智紗都の話をするわけです。友人たちも、その姿を見てほんとに辛かったんだろうと思います。だから、友人は私のために、「もう智紗都の話をするな」と言ったんですが、その時思ったんですね。「ああ、お前たちにとっても、もう2年なんだ」と。私にとっては、たった2年です。たったの2年です。

今、22年経ちました。まだ、たった22年しか経っていません。

私は、22年前の9月26日、9月27日、10月10日、10月11日、10月12日、ものすごく覚えています。はっきりと脳裏に残っています。最初に見たあの智紗都の顔。私は、数百枚、数千枚近い写真を家中に貼っています。だけど、どんなに写真を貼り続けても、スマホの待ち受けを、智紗都や家族にしても、最初に思い浮かぶのは、富田林署で見た変わり果てた智紗都なんですね。それが家族なんです。それが子どもを亡くした親なんです。

【遺族は、ずっと笑えない生活を送っている】

ほんとに、これは、私だけではなくて、交通事故や病気で子どもさんを亡くされたご両親も同じことです。何か自分の非を見つけて、何か自分が悪いことをしたんだというような思いに囚われて、自分を責められます。皆さん、頭の中では、交通事故を起こしたやつが悪いんだと分かっているんです。自分の子どもを轢いたやつが悪いんだと。だけど、そういう人たちも、結局は自分が殺したと思うようになってしまいます。それが、大多数の遺族です。

私は、去年の6月、自分が知っている遺族の方たち30人くらいに電話をしました。電話をして、「笑えてますか」と聞きました。遺族の方たちが出した答えは、「笑えてません」ということです。遺族は、一度も本気で笑えない生活、そういう生活を送っているんですね。自分を責めることしか思い浮かばないんですよ。

今でも本当によく覚えているのが、ちいちゃんが中学生の時にバドミントンクラブに入って、「お父さん、一緒にバドミントンしよう。バドミントンの練習に付き合ってよ」と言いました。私は、「えー、きついからいいや」と答えました。私は、そのことをとても後悔しています。また、幼稚園の頃、ちいちゃんが「肩車して」と言った時、私は、「ああ、ちょっと腰が痛いから勘弁して」と言って、してあげなかったことがありました。

昔の思い出を探すと、それに対して後悔が始まるんですね。分かりますか？智紗都との大切な思い出が、自分を責める理由になってしまうんですね。私が知っている限り、遺族の方たちには、そういう話がとても多いです。

【娘が最後に行った場所に行くために】

そして、少し話が飛びますが、当然、遺族だから、ちいちゃんが最後に行った場所に行きたいと警察にお願いしましたが、「連れていきません」という答えでした。これは後で、捜査をされた警察官の方から聞いたんですけど、その智紗都の捜査を司る県警本部の一番上の方が、「そんなことに捜査員を裂けない」と言われたそうです。当時は、そういうことを普通に考えるような警察だったんです。智紗都の捜査も当然行わない。そして、見つかって、その埋められていた場所に家族を連れて行こうとしない。それが警察だったんですね。

しかしその時、夜中の1時頃でしたが、捜査をしてくださった東署の方たちが、頑張ってくれて、「米村さん、連れていくことができます。しかし、条件があります。ナビ付きの4WDが2台必要です」と言われました。

22年前の話です。それも夜中の1時頃。誰も知らない大阪で、どうやってそんな夜中に車を用意できますか。私は、藁をもすがる気持ちで、ホテルのフロントに「明日の朝の7時半までにこういう車がないと私たち家族は、ちいちゃんが最後にいたところに行けません。どうにかありませんか」とお願いしました。それから30分ほどして、そのフロントの方から電話がかかってきて、「米村さん、智紗都さんのところに行けますよ。車が2台用意できました」と言われました。

私は、思うんです。世の中の人はいいい人たちばかりだと。ほとんどの方はいいい人です。ただ、たまに悪い人がいて、智紗都はたまたま悪い人につかまってしまったと。

【今でも起きているスマホやSNSを介した劣悪な事件】

こういうこともありました。ちいちゃんの事件から数年後、ある女子高生が、ネットの中で自殺をしたいという書き込みを見つけてしまいます。その女の子は、「命を捨てるようなことをしたらだめですよ、大事にしましょう」と、一生懸命説き伏せます。そして、少しやりとりをした後に、その自殺をしたいという男性から、「一度会ってくれたら自殺を思いとどまるかもしれないので、会ってくれませんか」と連絡が来ます。女の子は、自分が会うことで命が助かるなら、ということで、会うという選択をしてしまいます。女の子は、会ったその日に暴行されて、絞殺されて、山に捨てられます。見つかるのは1か月以上経ってからでしたが、見つかった時には、骨に髪の毛がばらっと残るような姿で見つかったそうです。お父さんが、自分の娘が高校生になってある程度たったので、もう大丈夫だろう、そんな思いで高校3年生になったのを機会に3か月前に買ってあげたスマホが原因でした。

今も、同じように、スマホを介した、SNSを介したひどい事件が起きています。私は、22年前の9月25日までの普通の人生がずっと続くと思っていました。仕事をしながら、年老

いて孫ができて、そして家族に看取られて死んでいく、それが自分の人生だと思っていた。

【あの日から、家族の人生は全く変わってしまった】

だけど、違うんですね。たった1日。あの1本の電話から、私たちの人生、家族の人生は全く変わってしまいました。長女とちいちゃんは大学にやったんですけど、三女は大学にやりませんでした。それはなぜかという、仕事を辞めるという決断をしたからです。しかし三女にはちょっと勘違いされたみたいで、6年半ほとんど一言もしゃべることができませんでした。三女は、高校を卒業したら、ブランドものに身を包み、髪の毛をすごい色に染めて、派手な化粧をして、初めて被害者支援センターに行き、センターの方に「三女がこんな生活をしていると、どうしたらいいでしょうか」と話しました。そしたら、センターの方が言われました。「米村さん、ちょっと見方を変えたらいかがですか。三女さんは、生きることができなかったちいちゃんの人生を代わりに一生懸命生きようとしているんじゃないですか、そのように考えられませんか」と。

言葉とはすごいですね。目からうろこでした。そういう考え方があるんだと、三女を心から受け入れることができた瞬間でした。しかし、三女とは、今でも1週間に1分くらいしか話すことができません。「行ってらっしゃい」とか、「おかえりなさい」とか。今でも、ちょこちょこっとしか話すことができません。それはなぜかという、三女だけは自分がちいちゃんを殺したとは思っていない。だけど、三女から「ちいちゃんを殺したのはお父さんだよ」と言われるのがとても怖いんです。実の母親たちから言われましたから、三女から言われることだけはどうしても避けたい。だから、三女との会話ができません。これは私が悪いんですけど、そんな生活を22年送っています。

我が家は今、たまに夕食がありません。お酒のあては少し作ってくれますが、昨日も夕食はありませんでした。妻が作らない時があるんですね。だから、そういう時は、ごはんがあったらふりかけだけとか、納豆だけとか、卵だけとか、そんなふうな食事です。でも、それでいいんです。ちいちゃんは食べられないから。私たちは食べられるだけでとても幸せだと思っています。妻が辛いのは分かるから。

【孫の成長が支え、しかし、22年間で一番つらかったのは孫の誕生】

この22年間で、とても辛かったことがあります。それは、孫の誕生です。

皆さんの中には、お孫さんがいらっしゃる人がいると思いますし、また、お孫さんができた時には、とても喜ばれたことだろうと思います。私も、娘から電話を受けた時には喜びました。しかし、病院に行き、孫の顔を見た時に、もうだめになってしまったんですね。「もう、ちいちゃんは産むことができないんだ」と。なんでもかんでも、ちいちゃんと結び付けてしまうんです。ですから、孫の誕生が22年間の中で一番辛いこととして心に残っています。

ですが、今は、孫の成長が心の拠り所です。孫と会うことが、とても楽しみです。

私は、こういう活動をしていますので、新聞とかテレビに取り上げられることがあります。そして、孫の小学校の運動会の前日に、たまたま取り上げられました。そこで、長女が「ねえねえ、米村さん、昨日テレビに映ってたのは、あなたのお父さんじゃない？あなた、妹さんを殺されたの？」と言われてしまいます。

長女も、自分が妹を殺したと思っていた人間です。その後、長女に「お父さん、もう、ごめんけど、学校の行事には来ないで。来るならば一人で見てください。私たちに接触しないで」と言われました。

分かりますか？大切な孫と一緒に、運動会でお弁当を食べることができないんです。こんな人生おかしいですよ。それが、私たちの今の生活です。家族としては仲がいいので、たまには孫が遊びに来ますし、たまに買い物なんかにも行きます。だけど、それも年に数回です。それくらいしか、孫と自由に会うことができない。長女がちいちゃんの真実を孫に伝えていないんです。このような生活が、これから先もずっと続くのかなあとと思っています。

私は、妻に、事件から1年目、3年目、8年目に、「ちいちゃんのことをどれくらい考えてる？」という質問をしました。

私は、「ごはんを食べながらちいちゃんのことを考えてる、何をしててもちいちゃんのことを考えてる。だから1年目は100%でした。だけど、3年目、私は95%と答えました。ほんの少しだけど、ちいちゃんのことを考えなくていい時間ができたから。8年目、私は85%と答えました。少しずつ、考えなくていい時間が増えたから」と。

妻は、1年目も、3年目も、8年目も、「私は100%智紗都以外のことを考えたことがない。全て智紗都和結び付けて考えています」と断言しました。私は、実際、妻のそういう気持ち分かりませんでした。

私は、今でもそうなんです、刑事ドラマなんかで若い娘さんが殺されるシーンってとても多いですね。そうすると、自然と泣けてくるんです。もうこれは、本当にどうしようもない。泣くなといっても、涙だけは出てきます。そういう私を見て、妻が「また、あなたは。もういい加減にきなさいよ」と言います。そうやって、妻は私を叱咤激励するようになりました。ああ、女性って強いなと思いました。

【事件が起きて14年…母が娘に宛てた手紙】

そして、事件が起きて14年ほど経って、私は、妻に「ちいちゃん宛に、1回でいいから手紙を書こうよ」と、提案をしました。なかなか妻ははいといいませんでした。3か月ほど経って、やっと妻がしぶしぶ「分かった、じゃあ、1回だけちいちゃんに手紙を書くね」と言いました。家族のために食事を作り、私を叱咤激励するようになった妻が、14年目に書いてくれた手紙があります。それを最後に読ませてください。

「母より

ちーちゃん、もう14年も会ってないヨネ！今、もしどこかで生きていられたら、どんな

旦那様とどんな子供達と出会えていたのかな？ちーちゃんだから、子供のしつけをちゃんとして良妻賢母、きびしくてやさしいお母さんになっていたよね。仕事も、大好きな子供達に囲まれて、保育士さんになっていたよね。そしてお姉ちゃん家族とも仲良く、お父さんとお母さん、妹も大事にしてくれたよね。楽しい未来を描けていたよね。

なのに、世界中どこを探してもちーちゃんと会えない。あの男はちーちゃんだけを殺したのではない。ちーちゃんの子供も、その又子供も、その次の子供も無限に殺した。ちーちゃん一人の命、それが誰の命であっても同じです。その命の重さは未来の子供達の命を奪う事。その事を重く考えて解ってほしい。この事はちーちゃんが教えてくれたよね。

何だかんだ言いながらお母さんはもうちーちゃんの3倍も生きてしまいました。出来る事なら、ちーちゃんの未来の為、お母さんの命と変わってあげられれば良かったと、いつも思います。お母さんはもう十分に生きてきました。今ちーちゃんより長く生きている事、ちーちゃんを助けてあげられなかった事、償おうと思っても償うことが出来ない。それはお母さんの後悔であり、お母さんの罪なのです。本当に、ちーちゃんごめんなさい。お母さんの方が長く生きていてごめんなさい。ちーちゃんの事守り切れなかった母をどうか一生許さないで下さい。

平成 30 年 1 月 26 日」

【命の大切さを伝えて…智紗都をたくさん生き返らせてあげてください】

自分が生きていることを罪という人生をどう思いますか？ちーちゃんの3倍生きていることを許せない人生をどう思いますか？孫が生まれたことが一番つらい人生をどう思いますか。これは、人間が送る人生じゃありません。そういませんか？だから、ここにいらっしゃる皆さんには、子どもたちに「生きなさい」と伝えてほしいんです。壁にぶち当たっても、命を落とすという結論を出さないように、そういう結論を出す前に、「逃げなさい」と。「あなたたちは、生きているだけで、お父さんお母さんを幸せにしているんだから」と。もう、口を酸っぱく、もう何回でも、何十回でも言い続けてください。皆さん方は、今日がずっと続くと思っているじゃないですか。子どもたちは、絶対帰ってくると思っているじゃないですか。だけど、違うんですよ。

私は、長男を病気で亡くしています。だけど、長男の死は、家族でどうにか乗り越えることができました。まだ、小さかったから。だけど、ちーちゃんと一緒に生きた20年という月日はあまりにも長すぎて、ちーちゃんの死は、どうしても乗り越えることができません。

こんな話を聞いて、少しでも「命が大切だ」、「この話を子どもたちに伝えようかな」とか、「周りの人に伝えようかな」と皆さんが思われた瞬間、私は智紗都が生き返ると考えています。私が話している間は、この中の一人でもそういう気持ちになれば、ちーちゃんは生き返る。だから、どうか皆さん、智紗都をたくさん生き返らせてあげてください。命の大切さを周りの人に伝えてください。毎日、毎日楽しく、楽しく生きて、そして、長く生きること。それを子どもたちに伝えてあげてください。私はいま、子どもたちが親よりも長く生

きることが一番の望みです。絶対、生きていることを罪と思うようなお母さんを作ってはいけません。そのことを伝えてください。そういうお母さんがいるということを伝えてください。お願いします。

今日は、どうもありがとうございました。

(講演時間 60 分)